

丈草の記 宮武藤之助

宮武藤之助

記す

※変体仮名は現用の仮名に直した。
※適宜、語句の横に漢字や仮名を補い、「、」。「。」を付した。
※「はしがき」は、適宜、かなを漢字に直し、アラビア数字を用いるなど、現代文(意識)にした。

「(表紙) 丈草の記 宮武藤之助」

はしがき

高く伸びた野草を踏み分けて、精魂の限りをつくし、ようやくたどりついた峰の
いただきに、太陽が今まさに暮れようとしている。このような時に、はるかな故郷を
想う。二人で行くお遍路にも似たような姿で、明治10年4月の始め、讃岐国今津
の郷(現香川県丸亀市今津町)を出立した。あどけない男の子(※宮武藤之助自
身のこと)は白髪の翁となり、ここまで来た八十路の足跡は、露草に覆われてしま
い定かではないけれど、私が命をかけてきた旅であるので、懐かしく、慕わしい限
りである。冬は凍てつく氷にさいなまされ、激しく波立つ北海の波と闘い、夏は、原
始の森で吠える熊に暁の夢を破られて、寝る暇もないその頃を思い出して記す。
もって、この記を丈草記という。

昭和24年春日

憶えば、私共一家族六名が、同郷人十八戸、総員九十余名の一行と共に、北海道に
移住したのは、明治十五年の春もおそい五月であった。それは前年の明治十四年
に、幌別へ移住した方に、津村柳吉氏や神職をしていられた某氏外二名の者があつ
た。たまたま神主さんが帰郷せられて、北海道の事情を詳細に話し「こんな狭い
讃岐に居るより北海道に行き役所に願出れば、何程沢山でも払下を受けられる
し、亦努力次第でとんな大地主にもなることが出来る」とのことであり、又
魚介類は殆ど無尽蔵ほしただけは何時でも得られるとの事で、両親も大いに気
を動した。其の頃、日高には赤心社として開拓を目的とする移民招致の結社があり、
北海道の事情につき啓蒙宣伝していた。そして赤心社に応募すれば旅費一切は支
給され、農器具住宅など貸与され、その他種々の便宜が与へられるとのこと
ではあつたが、それには種々の条件の伴ふことでもあり、彼これと考へ合せた
結果、私共は困難な、而も悪条件揃てはあつては、将来に希望つないで神主さん
の奨めにしたが、自由移民として渡道することに意を決したのであつた、然し
なから、親戚の誰彼も蝦夷が島として人々の忌嫌ふ北海道へ自ら好んで渡航す
る事など、およそ正気の沙汰ではないと批難を浴せたものであつたが、心を鬼に
して住みなれた家屋敷・永年耕した田畑を手離してしまつた時の悲しさ辛さは、

今ても忘れることが出来ない。愈々渡航準備も一切整ひ、断して北海の天地
 に一花咲かせて見せるぞと決意も固く、批難非謗もなんのその、一家六名のもの
 は、四月始、親戚・知己・大勢の村人に見送られて、涙に袖をしまりつゝ悲壮な旅
 路についた。丸亀港までは徒歩、それより先は海路である。遥に霞む象頭山金比羅
 大権現に海路の安全を祈願し、慕しい故郷の山河の見おさめをした。かくて神戸
 港に破泊一日半、横浜港に五日と風を見定めては航海を続け、五月の始め、若葉
 の香も爽かな函館に北海道への第一歩を印した。函館から室蘭までは月に三回
 の定期船があつたが、丁度荒天続きの為、大型発動機船の様な船では出港も不
 可能で、五日、十日と函館滞在 永びいては宿屋払も次第に 嵩み、その負担は
 当時の私共一家にとっては生やさしいものではなかつた。函館区役所は、此の
 窮状をみかねて、東本願寺に収容して種々の便宜を与へてくれた。旅路に在り、
 人の情にうえてる私共は、有難く感謝して自炊生活をする事になつたが、出
 港は一日又一日と延ひて毎日何等為すこともなく徒食していることは、一
 日もはやく現地に至り、開拓したいと 希 っている私共にとって、これ以上の苦
 痛はなかつた。東本願寺の住職も、私共のこの苦衷に同情されて、遠く亦種々
 の状況より考へて、極めて困難な幌別へ入植するよりも、地味のよい函館附近
 の未墾地の貸下を受けた方が、皆さんの為にはよいと思ふ、か如何か、と度々の
 親切なおすゝめもあつたが、始めの決心を貫徹したいの一筋の心から、出港を一
 日千秋の思で三十日を暮したが、これ以上時日を空費することに堪えられず、

陸路七里の山道を森まで 徒歩することにきめ、肯負えるだけの開墾用具、そ
 の他の荷物を取纏め、艱難 辛苦の限をつくして森へ到着することが出来た。
 森・室蘭間は毎日定期船が出ているので、たやすく室蘭へ渡ることが出来た。当時
 室蘭は、既に三百戸にも余る大市街であつた。翌朝一同は旧山道を歩いて幌別へ
 向つたが、女や子供連の旅であり、その上沢山の荷物を 肯負つて旅、しかも路
 は丈なす雑草に覆はれている細道の左右には、野生の馬が此処彼処に百頭、二
 百頭と群居して行手を 蹠る。歩は遅く、行けども歩めとも道は遠く、心も体
 も疲れ果て、淋しさはつりのり、女や子供達は泣きながら、励し合ひながら、春の
 日永の暮も近い七時過、目的地幌別へよう／＼のことで 辿り着くことができた。
 故郷の今津村を出発以来、実に四十余日を旅路でくらししたのである。予て神主さ
 んに指南された小屋の留守番の老翁に迎へられて、草鞋を脱いで 天井を見れ
 ば、天井には話に聞いていた鮭が五百本余り吊されて居り、流石は幌別だなど驚
 き、かつ歓喜の裡にこれを賞味して一夜を明かした。この頃、幌別には漁撈に従
 事していた土人の家屋五十戸、片倉家の旧家臣である帰農者五戸、南部家の旧
 家臣三戸、駒通一戸があり、来馬山麓一帯は鬱蒼たる樹林で、原始の巨木は枝
 を交て天空に 聳 立つ、物淋しい一寒村に過ぎなかつた。土着民の大部分は、
 開墾や漁師として働き、血気の若者たちは、遠く千島やカムチャッカにオットセイ
 やラッコの捕獲に出稼して、わすかに現金を得て日用物資を購ふに過ぎず、
 生活は頗る困難なものであつた。この窮状から逃れて、片倉家の旧臣たちは幌別

を見限り、地味もよく札幌に近い白石等へ再移住させざる位であつた。氣候に恵まれ、平坦な畑で楽な讃岐の農業に親んでいた私共一家は、かねて十二分の覚悟はして来たものゝ、幌別の現実の土地に立むかつた時、如何ともなす術をしらなかつた。けれどもきほひ立っている私達は、早速、東来馬の現在の吉岡家の位置に仮小屋の建設にかかつた。先ず手頃の股本を二本みつけて主柱とし、この股に丸太棒を渡して棟木とし、萱をかつて屋根を葺き、下見板代りに丸太を積重ねた丸太小屋である。光線とりの窓には簾を吊し、雁皮の皮をはぎとり、これを夾んで燃して灯火とする有様で、土人等の住んでいる小屋にも劣る、単に雨露を凌げるだけの掘立小屋ではあつたが、一家総出で数日の汗の結晶として出来上つた時の嬉しさは、何ものにもたとえ様のないものであつた。翌日からは天をも凌ぐ大木と、密生する熊笹を相手の開墾である。かねて用意の開墾用具では、螞螂の斧といった有様で、仕事は遅々として進まず、それでも播種の時機を後らせては大変といふので、懸命の努力で、一家六人で一日に二坪か三坪、拓き易い処で数坪拓いた処には、其の日のうちに種を卸す。かうして毎日汗みとろになり、作業を続けるのである。又、播種した畑のまわりに聳立つ大木は、夏になるにつれて、葉が繁つて畑に陽が射さなくなる。木に攀登つて枝を払い、わすかに日光にあてる。こんな苦勞もなんのその、芽を出し花をつけて収穫の秋に希望をつなぎ、胸を躍らせていたのであるが、北海道の氣候風土に慣れぬ種子は、丈は伸び、花は開くが実は一つも着かない。籾も棉等も同様

で、わすかに秋薯を少々とり入れたのみで、殆ど収穫は皆無に等しい悲惨な結果に終つた。此の冬を何として暮らさうか、とうして食へようか、言はすとも語らすとも、一家の誰の頭からも離れないのである。この暗い悲しい気持はあばら屋の空気になつて、誰もものを言ふ者すらなくなつた。室蘭へ行けば食糧はあるが、現金はなく、又現金を得る方法もなく、如何ともする術もなく、わすかに大川に上る鮭を獲り、野草を食して、讒に露命をつなく。一家六名の者は、互に励し合ひ助け合つて、来春に希望をつなぎ、春を待つて又開墾をし、昨年拓いた畑に種を播いたが、昨年同様の結果となり、為す事する事の総てが、事志とちがひ、悉く失敗に帰し、第三年目の明治十七年には、種迄も食尽してしまひ、拾ひ昆布・野路こぎみ・わらびの根・うはゆり・きとびろ等、食えそうなものは何ても食して生命をつなぎとめた。何ても食べて生きようといふより、むしろこんな北海道の果に来て死んでなるものか、是が非でも仕事をやり遂げねばならぬといふ、精神の力で生きたのであつた。このような惨めな生活の中にも、なほ人間には慰安があるものである。かゝるとん底の生活にも生きるよろこびがあるものである。この頃、大川は秋ともなれば鮭が汎濫して、殆ど河底が見脱げ、なへことか屢々である。村の人々が、総出で我も我もと獲り放題、つかみ放題、すくひ上る、三本鋤でつき刺して獲るといふ、工合、腹を裂けば、見事な筋子がそろく出てくるので、そろ子と言つたものである。貧しい夕食の雑炊の中に、これを真紅になる位、沢山入れ

て煮込んで食べる時のうまさ、今から考へれば、非常に贅沢極まる御馳走ではあるが、当時としてはこうすること以外に空腹をみたすことが出来ないのてあ
(大山樽一斗三升入)

る。余ったぞろ子は大山樽へ塩蔵して置いて、これを売ると七十銭位にはなった。又、こんなこともあった。或る夏の日の朝、物凄く海が荒れていた。起き出で見ると、鳥が夥く海岸で群騒いでいるので、近よってよく見れば、北寄貝が海岸にうち上げられ、その大部分はわれ貝となつて肉がはみ出ているのを鳥がつついているのである。さうそくこれを拾ひ集めて茹で上げ、乾燥して売った。何しろ需用の少い頃であり、値段は極めて安いものではあったが、貧しい家計の助にしたものである。当時北寄貝は、無尽蔵といつてもよいほどであったのであるが、漁獲方法が幼稚な為、そう沢山は獲れなかつたものであったが、此の頃千葉県から移住して来た東峰彦作氏は北寄貝採取の機械を移入して盛んに獲つた為、俄に、海岸は貝殻の山となり邪魔になつたものであるが、後、内地から渡来した人々の中に、此に着眼して石灰を製造する人ができて、貝殻は海岸から姿を消してしまひ、よろこんだものであった。

明治十七年の秋から、現在の輪西製鉄所附近一帯に排水工事が施されることになり、私にもその人夫として働かぬかとの事であった。それはやがて此の方面に屯田兵が配置移住させるためである。その日の糧にも事欠く時であったので、これ幸と早速出稼した。一日三十銭、父と二人汗みづを流して稼いで六十銭、その中

から食費を差引くと、いくはくも残らないのであるが、現金の手に入らぬ時なので、私共一家ではよい働であった。翌十八年の夏から秋にかけて、幌別白老一帯にかけてばつたの発生が夥しく、畑を食荒して農家を悩ませた。ばつたが襲来すると、今迄まはゆく輝いていた太陽も、日蝕時の様に薄暗くなり、その翅音は飛行機の如く、一夜の中に畑を食つくしてしまふといふ、すさまじい害毒を及ぼすのである。札幌県は多数の人夫を雇ひ、これを駆除することになり、私も生活困難の折柄、応募して白老村仙台陣屋から約一里奥に掘立小屋を急造して、共同自炊して駆除にあたることになった。先つばつたの襲来しさに見える原野に、中三尺、深さ二尺、長さ三十間はかりの壕を掘り、ばつたが襲来して壕に落ちるのをまて、急いで土を掛けて埋める。壕に落ちないものは、棒の先に撓皮をつけた唐竿のやうなもので叩き潰すといふ、極めて原始的な方法ではあるが、これ以上の良策はないのである。一日の作業を終へて仮小屋へかへつて見ると、部屋中は毛蟲だらけで、食事の中の茶碗の中へも鍋へも入る仕末、茶碗の中から毛蟲を箸で摘み出しながら食事し、寝るにも着衣のまゝころねする。一日三十五銭の人夫賃ではあったが、仲々容易の仕事ではなかつた。又或る時は道路人夫となつて稼いだこともある。それは苦小牧から三里程先の国道の修理である。膝から二、三寸も深い水中で終日、畚担きをするのであるが、泥の中で一日あひるの様に水に浸りながら作業を続けなければならなかつたが、幸なことに病氣らしい病氣もせず、こんな過激な労働にたえられ

たのは、全く気をはりつめてはたらいた為であらう。こうして得た金は、一銭残らず家計の資として、かへるとその翌日から早朝から夜おそくまで開墾するのである。一年を四百日にも五百日にもする気で一生懸命稼ぎ続けたが、暮しは一向に楽にはならず、野草を食ひ、昆布を拾ひ、干魚を齧(かじ)つて秋の収穫を待つのである。粟・いなぎびの実る頃ともなれば、子供達は雀追(い)ひをしなければならぬ。早朝からほうほうと威勢のよい声が聞えるか、午后ともなれば十分な食事をしていない為であらう、声を出す元気もなく、遂にはひよろ／＼と歩む力さえつきはて、家へ帰る。待かねて夕食の箸をとれば、雑炊の中に多数の蛆蟲(う)がいるといふ、有様である。それは郷里から大樽に味噌をもつて来たが、非衛生極まる仮小屋である上に、便所も近く、蛆蟲が夥しく発生し、蠅となり、いきほ(お)ひ味噌の中へも入るのであるが、赤貧の私共一家にとっては此を捨てることが出来ず、蛆を拾つては鍋に入れるのであるが、なほかつ雑炊のお碗の中へも入り、蛆虫を拾ひ(い)ながら食事をしなければならなかった。今から考へると、よくも病氣もせずに済んだものだと思ふ。当時室蘭には、しけ(時化)の為定期船の欠航に備へて、県で米を貯蔵して置いたものである。そして三年毎に古米を払下げがあるとのことで、飛立つ思で、五里の道を徒歩で室蘭に行き、毎日一斗五升で三十銭也の代金を支払ひ、五日間肯負ひ続けた米は玄米で、白がないので、そのまゝ粥にしたが、三年間も不完全な貯蔵をしていた為に、無数に鼠の糞が

混り、米粒の数よりもむしろ糞の数が多いので、どうにも撰(ひ)ひたでもならず、又撰(ひ)ふ、時間も惜しいので、そのまゝ炊くと粥鍋の底には黒く糞が沈み、焦茶色の古臭い米の臭気、鼠糞のむかつく様な何とも形容することの出来ない悪臭、粘り気のないお粥ではあるか、餓死寸前の私共一家にとっては、うまいとかまずいとか、きたない等とは言つてはいられず、又そんな事などたいした苦にはならなかつた。こんなひどいものを食へ、朝は残月を見ながら野良に出て、夕には星をいだいて家にかへる。精一杯働いて働いて身を粉にして働くのであるが、生活は少しも楽にはならなかつた。疲れ果て、床に入つても、この悲惨な運命に枕のぬれぬ日とはなく、それを憶ひこれを想ふていつしか朝になる。若い頃なのでともすれば捨鉢になる気持ちを引き立て、また一日馬車馬の如く働いた。食物はそんな有様で着物はそれよりも一層甚(だ)たしいのである。私は冬になるまで、足袋は勿論の事、草鞋さえも履なかつた。飼主さえもわからぬ何百頭もの馬が、丹青(丹青)した畑へ入りこみ、作物をくひ荒す。見つけては一刻もはやく追出さねばならぬ。こんな時には開墾の鋤を投捨て、剣の先のやうに鋭利な竹の切株、萱の根株、大木の根株の間を素早く駆けつける。馴れるとおそろしいもので、足の皮は熊の足の皮の様になり、怪我はおろか萱の根株はへし折れ、竹の根株は折れ曲る様にさえなつた。十月から十一月にかけての鮭とりにハ、葡萄蔓で造つたわらじを履き、川石の上を伝つて歩く。冬になれば鮭の皮、犬馬の皮を手縫で靴のやうに造り、中へ干草藁などを敷き素足でこれを纏(ま)ふくらみなものである。川

に上った鮭の皮で造ったけり(ケリ)は非常に丈夫なもので、土人等の荒稼に常用しても、月に三足あれば十分である。あまりな生活の苦しさ、父が郷里を出る時、全財産を処分して得た金の一部を、万一の用意に親戚に預けて置いたものを送金して貰ふ(う)ことにしたが、手紙が着いて中を開けば、たった五円より入っていなかった。当時の五円は相当な金ではあったが、それでも六名の家族の急場を凌ぐには、これだけでは如何ともしがたく、何とか百円ほど送金してほしいと依頼した返事に、室蘭郵便局で取扱限度は五円まで、それ以上は最も近い処で、森郵便局だとのことである。改めて森局宛百円送金をたのみ、森局へ徒歩で受取に行った。交通不便な時代の事であり、手紙の往復に一月はかゝり、二、三度往復していれば、三、四か月はかゝるのである。この間の不安な気持、苛立たしい気持は並大抵なものではなく、言葉に言ひ表すことの出来なひ、陰惨な空気が小屋中にみちてしまふ(う)。何とかして此の苦境を打開しなければならぬと努力して見ても、別に内職があるわけは、(て)は、(は)、如何とも致しかたなく、全く途方に暮れてしまった。当時森は室蘭の三倍近くの人口を有し、立派な市街をなしていた。父は森で金を受取り、そのついでに函館へ出掛ける途中道つれになった老人と話合ひ(い)、四方山の話のついでに私のよい奉公口がないものかと話した処、よし承知したとの事で、自分としても現在の生活の苦難を切抜けるには、どうして百姓ではだめだ、何とか別の職を考へていた矢先なので、早速旅仕度を整へ、函館に此の老翁を訪ねた処、直ちに古道具屋手代に世話してくれた。これが自分の商

人になった第一歩なのであった。古道具屋の家族は主人夫婦に子供二人、手代自分とで五人、自分は誰よりも先未明に起きて店の掃除をする。火を焚付ける。どろどろのお粥をつくる。きらづの味噌汁を炊く。やっと出来上った頃、主人夫婦子供が起きてくる。朝飯をかき込む。後片付けをする。お客の相手をする。使に行く。まったく寸暇もないそがしき、而も主人は夫婦揃ひも揃って強慾非道一片の仏心も持っていない人達で、早朝から夜おそくまで酷使されるので、深夜くたくた(くた)に疲れきって床に入るのが常である。その頃函館には、内地から一攫(獲カ)千金を夢みて来た人々が多く、開拓者にしても商人にしても、計画通りにゆかず、夢破れて十一月、十二月ともなれば、借財をふみ倒して夜逃げする人が非常に多かった。この時季が古道具屋の書入時である。何時の船で出帆するから、内密で家財道具一切を買取って貰ひ度い、そこが道具屋のつけめで、つけ値の二束三文で買取る。主人はこんな時にはきまつて酒と肉鍋を用意させ、深夜に家財道具の運搬を始め、仕事を終へるのが何時も二時過になるのが普通、少し荷物が多いと三時も、もっと遅くなることもあった。仕事が終わると、あつた御苦労だった、さあ早く寝ろ、これで終りである。若い食べたい盛の頃なので腹は空く。下の主人夫婦の室からは、食欲をそゝる芳香が沸き上つて来る。とてもねつかれるものではない。然し奉公人の身であれば、涙をのみ、唾を呑み込んでいる間に疲れて眠つてしまふのである。かうして此の道具屋はぼろい濡手に粟の営業でめき(めき)くと身代を太らせ、また、く間に大した古道具屋に成上ってしまったが、悪

銭身につかずの諺の通り、主人はおごり、金遣も荒くなり、はては妾を抱へて金を注ぎ込む。はては夫婦喧嘩も多くなり、見る／＼家運も傾き始め、はては遂には店仕舞をして福山に引越すことになり、お前も奉公口を見つけたといふこととて、一ヶ年の酷使の代償として着古した袴一枚を貰っただけで簡単に解雇されたが、余り突然のことで、今後どうして暮したものであらうか、思案さへもつかなかつた。食はよし、金にもなる船乗にならぬかとの親切なすゝめもあつたが、余り気がすゝまづにいた時、ふと往時渡道の際同船した田原万吉氏が函館に在住していられることを思ひ出し、早速訪ねて身のふり方を相談した処、西川町の豊川といふ蕎麦屋へ座敷廻りとして住込む様に世話してくれた。此処では月給がなくお客の心付が収入の全部で、それでも三円五拾銭から五円位にはなつた。今迄に比べて食物はよく、魚・豆腐等栄養になるものをとるので、一ヶ月足らずの間に体もめき／＼と肥り、知人達にも驚かれるほどであつた。こうして豊川で働いている中、ある日のこと、偶然にも旧知の木下成太郎氏が来店された。木下氏は兵庫県の人、私共一家と同時に幌別へ来り、オカシベツへ入殖されたのであつたが、うまく行かず、両親は室蘭へ引揚げ、全氏は单身函館へ出ていられたのである。絶えて久し振でお会出来て、種々積る物語に時を過したが、話の末に君の様な若い者が蕎麦屋等に奉公するといふことは将来の爲にならない、私の店に来てはどうかとの話である。自分としてもいつまでも座敷廻りをしていく積もなく、言はゞ一時しのぎであつたので、田原万吉氏より主人に暇を

貰ひ、当時函館で酒類・味噌・雑貨等を手広く扱っていた三中商店へ奉公することとなつた。木下氏は全店の支配人を勤めていたのであつたが、商才もあり人柄も立派な人なので、後厚岸に自分の店を興し、財をなし地盤もつくり、同地より代議士に上られたのは、それから四、五年の後である。自分も木下氏が全店を去つた後、間もなく三中商店を辞し、ようやくためた百円余りをふところに、これを元手にいつかは大醸造家になつて見せるぞと、淡い夢を抱きながら幌別への帰途にいた。さて幌別へ歸つては来たものゝ、暫くの間力仕事をしなかつた為、銚をとつても昔の様には働けず、何とか方向を変えねばならぬと考へていた時、役場の小使にならぬかとすゝめてくれた人があり、早速役場に出頭、小使として雇はれることにした。当時の役場は、戸長制で戸長を警部が兼任し、外に巡查二名、片倉小十郎家の旧臣である筆生二名、小使を合せて六人である。自分の月給は三円五拾銭、宿直料を合せて四円の収入で、昼間、役場の勤務を了へて後、巡查や筆生の家庭の水汲の奉仕をするのが毎日のつとめであつた。或る晩のこと、仕事を終り疲れたまゝにひざを崩していると、筆生の一人が小使の分際で失礼なやつだ、ひざを直せと叱られたのである。私は口惜く、その夜は遂に眠れなかつた。そして身分が低い、家が貧しいから、人からいやしめられ軽んぜられるのである。何時かは彼等を見下す身分になつて見せるぞと、固く心に誓ひ、其の月から収入の半分は必ず貯金する事を実行した。

かくする中に室蘭郡・幌別郡は鷺別村役場の管轄するところとなり、本村役場は鷺別に引越し、小使である自分も、役場と共に鷺別の黒沢旅館に月三円也の約束で下宿した。月給も五円となり、役場の仕事にも慣れてきた。勤務を終って下宿に帰ると、薪をこしらへる、水を汲む、火を焚くなど種々の手伝をしたので、宿の主婦は下働を頼んだよりも仕事がかたづくと言って、大そう喜んでくれて、下宿代もとってくれない。この主婦の打算を離れた温かいあつい厚意に報ゆる為にも、若い私は感激して一生懸命に働き喜んで貰った。こうした小使勤務も三ヶ年、明治二十三年春、職を辞して幌別へかへり、かねて貯へていた金で家屋と屋敷百五十坪、馬三頭を買求め、早速馬に乗り札幌へ出掛け馬車道具一切を買入れ、帰る途中、通行中の旅人に乗って貰ひ、五円余りの金を稼いだ。それから毎日、白老迄旅客と荷物を積んで行き、全地で土人の家に泊めて貰ひ、翌日は幌別へ来るお客と荷物をつけて帰る。そして自分はなるべく賃金を廉くして、多くの人に乗貰ひ、お客の負担を軽くし、而も速く楽な旅が出来る様にと考へて実行したので、一人の賃金は廉いがお客が多いので、相当多額の収入を得ることが出来、生活にも裕が出来る様になり、道庁からも駅逓取締を命せられる事となった。私は早速馬五頭、馬車二台其他馬具一切を購入し、土人の十六才ばかりの子供を三人雇入れ継立業を始めた。若者達は白老・旧室蘭・新室蘭へ乗客や荷物を運び、自分は夜中の客のみ扱ふ様にした。こんな事は月に二、三回よりなのであるが、なか／＼辛いもので、しかも雨風の烈しい晩や大吹雪等にお客が

あるものである。こんな時は如何に馴れている道であっても薄気味の悪いもので、わけても旧室蘭元輪西の海岸等は殊の外もの淋しく、只聴えるものは波の音ばかり、やつの思ひで旧室蘭の駅逓にお客を渡し、かへりは独りである。当時、知里別に屯田兵が移住して居たが、彼等の中には食に窮して自刎するものなどあり、若い頃なので随分薄気味悪かったものである。鷺別の橋を渡ると、もう大丈夫と気がゆるみ、馬に乗ったまゝ、居眠をして馬から落ちて始めて気がつくといふことも度々のことであつた。けれ共、有難いことに怪我一つしたことがなかつた。然し随分体に無理をせねばならないので、こんな仕事をやめてしまおうかと思つたこともあつたが、その都度気をとり直して仕事に精を出したものである。こんな難儀な仕事だけに、収入は相当の多額となり、生活も次第に裕のあるものになつて来た。弟新吉は、自分と同様、お客や荷物を乗せて苫小牧札幌間を往復していた。馬車も二頭挽五人乗りの客馬車と、他に馬二頭をもっていたので弟の収入も可成りの額となつた。これより先、明治十九年には炭鉱鉄道会社が夕張室蘭間へ鉄道を敷設したので、交通は便利になり、幌別も次第に人口も増加して来たのに加へて、二十年から二十五年にかけては阿波・淡路方面から約百戸の開拓移民が渡来したので、幌別は一段と賑ふ様になつた。かくて生活も楽になつて来たので、二十三年の春三月八日妻を娶つた。式といつても極めて簡素なもので、来て貰つた人も家内の両親と吉岡嘉平氏・南彦作氏・津村柳吉氏外三方で、鰯の煮付、助宗の吸物に刺身といふ、田舎料理、それでも酒

だけは充分にあったので皆さんに嬉^(喜)んでいただき、祝福されて新生活に入るこ
とになったのは、感銘深く有難い事であった。

この二十三年の秋は九月から十一月始めにかけて鮭が大漁で、大川は鮭で埋つて
いた。手握みで獲り放題、仕舞には手で獲るのは面倒なので三本鋏^(イ)でつき刺す、
掬^(イ)ひ上げる、搔き上げる。川べりは人出で大いに賑った。自分はこれらの人々
から鮭を買集めた。値段は一尾二銭が大福餅二箇、鮭四尾では濁酒一升の割であ
る。こうして合計一万尾でそれを全部塩漬けにして置いた処が、十一月の八日自
分の馬小屋から出火して家屋全焼の災厄にあった。然し不幸中の幸といふ^(ウ)か、家
財道具は殆ど^(ト)運び出し塩鮭も全部、馬三頭も救出することが出来た。この鮭は、
翌年一月、一尾五銭五厘で幌別の浜から蒸汽船で函館へ売^(ヤ)捌いた。災厄の翌朝
から街の人々、農家の人々に手伝って貰^(カ)って、家の建築にとりかゝった。見舞の
人々からも、出火の時刻が大吉だから宮武の家も禍変じて福となり、愈々繁昌す
ること請合だと励^(イ)まして貰^(イ)ひ、有難^(イ)かった事は忘れられない事である。こうして
十二月三十一日には新しい家に入りいよ^(イ)く^(イ)仕事に精を出し、懸命に働かねばな
らぬと覚悟を新にしたのであった。

亦此の年で忘れられない事は、十一月三日記念すべき明治天皇陛下の天長節の祝
宴が司旅館で行^(ワ)はれた時のことである。会費は壹円で、当時の壹円は相当豪華
なものであった。二間通しての座敷が会場、自分は少し早目に行き、座敷の中程に
着座した。やがて幹事がつか^(ツ)か^(ツ)と自分の前に来て、誠にすまないが、もう少し下

座に下って貰^(イ)ひ度いとのことである。すべての人々が同じ会費の此の宴席に、差
別をつけるとは、と誠に残念に思^(イ)ひ顔色も変り退席しよう^(ウ)と考へたが、辛^(ウ)ふ
じて自分をおさ^(エ)へ、祝宴を終^(エ)へて帰宅したが、この日は自分にとって誠に記念
すべき日であったと、今日猶思^(イ)ひ出すのである。曾^(イ)つて日、役場の小使として勤
めていた時、不作法なりと罵られた事等思^(イ)ひ合せて残念でたまらなかつた。その
時父は自分にこう言^(ウ)った。貧乏といふものは辛^(ウ)く悲しいものである。私の若い時
の事だったが、今津村の宮武本家は、近郷五ヶ町村の長者として人に知られた家
だが、長女の婿養子を貰^(イ)った時の被^(披)露宴に、本来なら別家の当主である私は上
席に着座して然る^(エ)へきてあるのに、村の若者達が石を投げつける悪習がある
から、見張^(イ)りをして貰^(イ)ひ度いと、体よくこの宴席から遠ざけられ、口惜しくて家
へ帰^(エ)へつてから泣いたものだ。お前もせっかく金を貯^(エ)へて財をつくり、人の上
座に座る様に心掛けなければならない。そして涙を浮^(エ)へて訓^(戒)誠された声は、今
でも聴える様な気がする。私は石にかじりついても財をつくり、人々を見返して
やらねばならぬと、父や母の前に誓^(イ)った事であった。

然し、決心はしても、その様に容易に金はたまらぬものである。当時は差当り百
円溜^(上)ることを目標にした。やうやく百円位たまりそうになると、馬車^(上)がこわれ
た、馬具^(上)が役に立たなくなつたとかで出費となる。今度こそは溜^(上)るぞと楽しんで
いると、食糧^(上)を買^(上)はねばならぬ、仕事着を購^(上)ねばならぬ。仲々百円はためられぬ
ものであった。こうして身を剥^(上)ぎ、骨を削^(上)る様な気持で荷物の運搬、お客の送りむ

かえの暇を見ては、畑の耕作をしたものである。こうした精進の結果は、日増に収入が次第に多くなり、暮しも段々と楽になるやうになった。家庭の暮しむきことは人目につきやすいものである。私の家の様子も人目にどう映ったか、それから後、幾年もたゝぬ時のことである。或るながしの祝宴で、私は例により人(辱)に褥をうけぬ様に、下座に控へていた処、貴君にそんな処にいて貰つては、外の人々の座る場所がない、と言つて、再三再四の辞退にもかゝらず、無理やり幹事が手をとつて上座へ座らせられたことであつた。人の世の中は、こんなにも現金なものであることは夢にも忘れてはならぬことである。

病氣らしい病氣もすることなく、身を粉にして早朝から深夜まで働いた甲斐があつて、ようやく資本も出来たので、かねて考へていた醸造業をやるうと考へ、明治二十二年に小樽から大桶五本を購入、杜氏を雇入れて、来馬の畑の中にある旧の住家であつた小屋を倉庫にして、諸味百石を仕込んでやつて見た処、その成績がよく、製品も案外良質のものが出来、売行もよいので氣をよくし、翌々二十四年には五間に八間の倉庫を建築、更に翌々二十六年には函館から二十五石入、大桶三十本半切桶その他の諸道具を入れ、設備を完備して業務を拡張、二十八年春には建上十三尺八間に十五間の醸造場を建築する計画を進め、四月八日には建舞を行ふ、予定であつた処が、当日の朝になって知人某氏が訪れ、貴君の建物敷地内に中二間の道路が通つている筈である、とのことで、それが若し事実なれば大變である、建舞を一先中止させて、早速馬を飛ばして室蘭に駈付け、税務署の

土地台帳を調査した結果、自分の土地には何等の関係もない事が判明したので、電信で作業を継続する様に命じ、再び飛馬を馳せて、その日の夕方には無事建舞を終つた事であつた。当時の土産馬は、耐久力もあり、随分速かつたもので、室蘭への往復でわずかに三時間半を費したのみであつた。その後、仕事も順調に進み、此の大建築が落成した時は、流石に嬉しくて永年の苦勞も疲れも癒えたかの如くであつた。直ちに大桶を据付け、大豆や小麦を買入れ、醤油の仕込にかゝつたが、建築に莫大の金を使ったので、流動資本がたりなくてこまつた。そこで窮余の一策を案じ、先づ買込んだ大豆と小麦を皮延で嚴重に荷造りして、室蘭の倉庫へ送り、倉荷証券を貰ひ、それを担保として安田銀行から金の融通を受け、小麦・大豆代を支払ひ、仕込の原料がなくなれば、製品の掛売代金を回収して倉庫へ倉敷料を支払ひ、仕込原料を請出して譲造すると言ふ、苦しいやりくり、算段で室蘭幌別間の運搬費や荷造費、運送途中の乱俵・鼠害・倉敷料・銀行利子等随分無駄な経費が高み、不経済極まるやりくりを三年間も続けなければならなかつたが、知人から札幌の北海道拓殖銀行で、土地担保で年賦償還の方法で金融するとの事を聴き、早速札幌へ飛んで、借入申込、鑑定人の現地調査、登記等の手続をすませ、十ヶ年賦年分の利子で千八百円を借り、これで大醸造家になれるぞと希望に胸を跳らせ、更に馬力をかけて努力した。先十ヶ年計画を立て、此の程建築した醸造場に更に八間に十間をつきたすこと、使用者の住宅を建て、石造倉庫を建築し、それに伴ふ、内容充実を期することを目安にした。

かくして総坪数二百坪の醸造場四十八坪の二階建、居宅十八坪の若者住宅も完成したので、私は杣夫を引連れて川上の鈴木恒松氏・鈴木建蔵両氏の二万坪の山の中から正木の胡桃を撰び、伐採して、木挽二名にひかせてこれを三人の桶屋に大桶を造せる、仕事の順序がよく人手が揃っていたので、仕事が非常によく進捗して、四十六石入りの大桶が月に三本から五本も出来るやうになり、こうして明治四十一年には百本出来上り、四千六百石の醸造設備が完成し、しかも此を充分活用出来るやうになり、自分の所期の目的も大半達成された。

此の間二十六年の初売からは、自家醸造の醤油の外に、酒・米・麦・雑貨類も販売し、舎弟新吉には登別村に家屋を建て、丸亀第一支店として分家させ、三十年には函館の人造肥料会社の特約店となり、直接農家は勿論、地方の肥料・雑貨商へ卸売する。三十六年には、幌別本町の食糧官団の場所に山本佐三郎を丸亀支店となし、三十七年には、苫小牧に宮武義則を丸亀出張所として分家させ、三十八年には、札幌ビール会社の特約店にならうと希望していたが、他の業者の邪魔が入り、思ふやうに行かなかつた処、当時代議士をしていられた木下成太郎氏の尽力により、それも実現して、沿線各地へ卸売すると同時に、自家醸造の味噌醬油も大いに売行がよくなり、一方、山形・秋田・新潟や津軽産の米を一手に引受け、精麦は讃岐坂出から移入し、これを広く販売した。かくして、商売も次第に繁昌して、四十一年の十二月には、拓殖銀行の年賦金も完済してしまった。この年の暮には、醤油の諸味手持八千石、味噌の仕込み六百石の手持があつたし、大豆はいつ

も二、三百石は保有していた。一方、本村の一等地の畑のみ七十五町歩、牧場百五十町歩を所有した。尤も、牧場のみは松井林太郎・津村柳吉両氏と自分の三人共同経営したのである。亦、建物としては、野幌の瓦会社製の瓦葺石造倉庫一棟前記の醸造場・居宅があり、支店は登別・苫小牧・社台・沙留太・室蘭の五支店を設けて、四十二才の厄年の盛大な祝宴を催した。亦、大正二年には、勇払郡厚真村に水田を六万坪を買求め、毎年玄米、一車百三十俵宛の収益を挙げることが出来た。亦、日野久橘・佐藤清左衛門両氏と自分の三人で海岸から砂利採取を計画し、これを積出す為、本線から海岸までの支線設置を鉄道局に願出た処、線路用地が宮武の私有地であるため却下となり、両氏は自分に此の土地を鉄道省に寄附するやうにすゝめられた。自分も幌別発展の一助になることでもあり、喜んで寄附採納願を出し、現在の支線が設置が可能となり、両氏は勿論、村民からも感謝された。両氏はこれを徳として積出した砂利一車につき、式拾銭宛を自分へ贈り度いと申出に、自分も感謝してこれをうけていたが、後年に至り砂利の需用が少なくなり、採算がとれず、私に採取権利を譲渡致し度いと希望も譲うけて、現在は自分の所有となっている。

こうして、四十五才までに自分の事業の大体の基礎は出来上った。この間の三十年こそは、正に血の滲み出る様な連続であり、荊の道そのものであった。若い者の常として、自暴自棄にならうとしたことも度々であり、より安易な途への誘惑も屢々であったが、其の度毎に自分自身をしっかりと、自己をいまして耐へ

忍んで来た。今にして思へば、右を見ても左を見ても、誰一人見知らぬ、しかも
熊の棲むといふ原始の森に、衣もなく食も乏しい、惨めな生活によくもたへ
て来た、自分自身をいとしく思ふのである。

然し、今一步進んで考へて見る時、自分では出来る限り、我が身の及ぶかぎりの
努力はしたものの、人の情世の中のおかけで、今日の私となることが出来た
ことを思へばこそ、自分は世の人々の苦しみ・難儀を傍観出来ない人間となった。
そして、自分の苦しい生活の中から凶作に苦しむ人々のために、水害で家産を失っ
た人々の為に、寄附をし、救済につとめた。そんな事で贈られた感謝状で、筐底に
蔵されているものだけでも百通にも余ることであろう。見孫の為に美田を買は
すとは先賢の教ではあるか、自分は見孫のために、敢て美田を買ひ度と念願
して来た。それは子や孫を楽して暮させようためではない、徒食させようため
でもない、世の中への大きな貢献も奉仕も実に財力の裏付がなくては、その全を
得ないことを信ずるか故にである。国破れて山河在り。敗れた祖国を復興する
力は財力にまたねはならぬ。我財の力は極めて微なれとも、いさゝかの貢献な
りともさせねはならぬと思ふのである。

これが今生の自分の希望の全てである。今や齢八十有二才ともなり、余命のい
くばくもないことを知る。自分の心臓のたしかな中に、八十路の荊次の道を顧
み、懐しさにたへず、これを録して以て吾が墓標とする。

を
は
り